セブン、バリアフリーvol.32 05.11.10 3:24 PM　ページ1

バリアフリームーブメント Vol.32

“いざ”じゃないとき知る知識！
“いざ”というとき引き出す知識！

バリアフリーな社会を生きるため、必要なことを先取りしよう！

〜今回のテーマ〜「共用品の配慮、あなたはどのくらい知っている？」

既存の製品をより多くの人が使いやすいようにしてくれるモノ、今まで使いにくかったものを使いやすくするためのモノ等、これからどんどん増えてくるバリアフリー化された製品や商品を紹介しているこのコーナー。

今回は〝共用品の配慮〟がどれだけ知られているか、関西・関東エリアにおける調査の結果を報告する。

（財）共用品推進機構　森川　美和・山本　修

バリフリー社会の実現に努める（財）共用品推進機構は、今年関西・関東エリアで開催された展示会に共用品を出展し、ブースに来場してくださった方々に、共用品の認知度やこれからの普及に対する意見や感想等を聞いた。

本調査は、今年4月21日（木）〜23日（土）の3日間、インテックス大阪（大阪・住之江区）で開催された『バリアフリー2005』に出展した際に、当ブースに訪れた方々163名と、9月27日（火）〜29日（木）の3日間、東京ビッグサイト（東京・有明）で開催された『国際福祉機器展H.C.R2005』において、当ブース来場者103名の回答を元にしている。

代表的な共用品の配慮

「シャンプーのギザギザ」知っている、約7割

障害者・高齢者等にも使いやすい製品（共用品）の代表的なものとして、「シャンプーのギザギザ」がある。

シャンプーにギザギザが入り始めたのは、今から14年前の1991年のことだ。

一企業が、目の不自由な人にとっても分かりやすい印として、「ギザギザ」を入れたことにはじまるが、一般の人も洗髪時には目を閉じることから、だれにとっても分かりやすい配慮として普及してきた。

また電話の5番に付いた凸記号については、関西・関東エリア共、約6割の人が知っていると答えている。

「バリアフリー 2005」展示風景

ビール缶やワインに付いている点字については、関西エリアで5.5割、関東エリアでは5割弱が知っていると答えた。

しかし、電話に凸点が付いていることを知っていると答えた方々でも、付いている理由を知っている人はあまり多くない。

電話の5番に付いている凸点は、目の不自由な人が電話をする時に、数字の中心を知る上ではとても便利な配慮であるが、目の見える人達でも、暗がりで数字が見えない時には、凸点は触って分かる印となる。

ビールの点字ついては、何か付いているということは何となく分かっていたが、まさか誤飲（ビールやお酒とノンアルコール飲料）を防ぐ印だとは知らなかったと言う人が多かった。

さらに関西エリアでは、牛乳パックの切り欠きや、家庭用ラップ側面のWマークについても、認知度を調べた。

牛乳パックの切り欠きは約3割、ラップのエンボスマークのWは1割程度の人しか知らなかった。

目の不自由な人が、同じ形の紙パックの中から牛乳を探し出すことは、大変困難であったが、この切り欠きによって、100％の牛乳が手で触っただけで分かるようになった。

ラップ側面にWマークをつけることで、同じ形状のアルミ箔との区別が触ってだけで分かるようになった。

これら全て、私たちが日常何気なく使ったり触れたりしているものであるが、その中には、たくさんの使いにくさを解消した共用品の配慮があるのだ。

これからのモノ作りには、共用品の配慮は必要！関西・関東エリア共に高い支持率

関西・関東共に、これからの社会に、共用品は必要だと思うと答えた人は約8割近い。

特に関西では、高齢者・障害者への理解を深め、共生社会への一歩となることを望む声が高く、関東では、共用品についてもっと知りたいという声が高かった。

また近年、日本で開催される福祉機器展において、学生の来場者が多くなり、アンケートの回答率も高い。

共用品について小さい頃から知ることは大事だと思っている人達は、回答者の半分程度だが、小学校や中学校に通う子どものいる方々からは、子ども達が授業で、共用品の勉強をしていて、大変興味を持って取り組んでいるという話しをうかがった。

子ども達は、いろんな場面で共用品の配慮を感じている

共用品推進機構は、展示会での普及とは別に、幼児や小学生にも共用品を伝える活動を行っている。

子ども達に伝える活動を開始する前に、幼稚園や保育園児にはまだ共用品の配慮などを伝えるのは難しいのではないかという意見が多くあった。

しかし実際に活動を開始してみると、3歳〜7歳の子ども達は、日常生活を送る中で、その子らしい視点で、色々なものに疑問を持ち、実際に触れ、感じ取っていることが分かった。

また点字や手話など、障害のある人達のコミュニケーション手段についても、「点字は、○○ちゃんちのエレベーターで見た」、「点字は、目の見えない人が手で読むご本にもあるよ」、「耳が聞こえなくても（両手で耳を押さる動作をして）、手でお話できるんでしょ？」などと、個々の視点で感じているようだ。

前述のエレベーターの点字の話をしてくれた女の子の母親は、「自分は全くエレベーターに点字が付いていることに気が付かなかった。いつ子どもが見つけたのか分からない。でもこんなことに気付く子どもに育ってくれてうれしい」と話す。

子ども達は大人の気付かないところで、色々なものを見て吸収している。

共用品には家電製品、文房具用品、住宅設備、乗り物等がある。

日常生活の中に、たくさんある共用品の配慮に気付くことはあっても、なぜその配慮が付いたかについてまでは、調べたり考えたりすることは少ない。

使いやすいなと感じたこと、これは何の意味があるのだろかと思ったことを、少し考えてみる時間を持ってみるのはどうだろうか。

「国際福祉機器展 H.C.R 2005」展示風景

（PR）財団法人 共用品推進機構☎03-5280-0020／FAX03-5280-2373
URL：http://kyoyohin.org/　E-mail：jimukyoku@kyoyohin.org